

障がいのある幼児児童生徒の学びを支えるICTの活用（実践編）

障がいのある幼児児童生徒の学びにおいてICTを活用する際は、幼児児童生徒の障がいの状態や認知の特性等に応じた適切なICT機器を選択することが重要です。実践編における各事例では、ICT機器の特徴や効果、活用におけるポイントを紹介しています。

視線入力を使った他者と関わる学びの実現

視線入力は、身体を思うように動かすことが難しい肢体不自由者にとって非常に有用なコミュニケーション支援機器の一つであるといわれています。意思の表出手段が限られている子どもたちが、自発的に自分の気持ちを周囲に伝えることができるなど、支援者との関係性に関わらないコミュニケーションツールとして活用することができます。また、視線探索ができることで、視機能の向上につながり、因果関係の理解や視覚認知面を育むこともできます。



1
見る力を育む

2
コミュニケーション力の向上

3
意思表示につながる

実際のエピソードより ～視線入力を活用することの効果～



視線を通してコミュニケーションを楽しむ



Aさんは、快・不快の気持ちを表情や声で表すこともあり、呼名などの言葉かけに対して視線を向けたり、追視したりすることがありました。また、何かを見るときに手を動かすことがよくありました。担任は「Aさんは視覚優位であるとは感じるが、どのように物を見ているだろうか？ どのような提示が望ましいのだろうか？」と、Aさんの実態に適した指導・支援について迷っていました。

Bさんは、注視・追視の動きがはっきりせず、全体をぼんやりととらえるように見ていると感じられました。日常の様子から視覚優位であるとは思われましたが、視覚を有効に活用できているとはいきれない状態でした。



Aさんを対象に、自立活動の時間において視線入力を活用して、物の見え方を確認したり、イラストを提示して教員とのコミュニケーションを図ったりする取り組みを行いました。その結果、ゆっくりと動かして提示する方が視線を合わせやすく、自分の好きなものを伝えようと教員とのコミュニケーションを楽しんでいる姿をみることができました。さらに、物を見るときに意図的に手を使って頭部を安定させているのではないかと気づきを得ることができました。

次にBさんを対象に、自立活動の時間において視線入力を活用したところ、対象に視線を向けて見る行動が定着しました。さらに、多くの教員から、見る活動が増えたことに加え、意思表示もはっきりしてきたという評価がされるようになってきました。



◆ 活動名

視線を使ってコミュニケーションをとってみよう(自立活動)

◆ 授業計画(例)

時	主な学習活動	ICT活用のポイント
1	○ 視線を合わせやすい姿勢をつくろう	<ul style="list-style-type: none"> 視線入力を使用する前は、頸部や眼の筋肉の緊張が強くなりすぎないように、緊張を緩めてから取り組む。 視線を合わせやすく緊張しない姿勢づくりを心掛ける。 緊張が強くなる場合は、頭部のサポートなどを行う。
2 3	○ 画面を見ることに慣れよう	
4 7	○ 見やすい提示の仕方を伝えよう	
8 10	○ 教員の言葉かけを意識しよう ○ 自分の好きなものを伝えてみよう	

◆ 本時の展開(例) (4/10時)

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点及び支援の手だて等
30分	<ul style="list-style-type: none"> 見やすい提示の仕方を伝えよう 1. 動いている画像を見よう 2. 静止している画像を見よう 	<ul style="list-style-type: none"> 背景に画像を入れた画面と背景が黒一色の画面の中で画像を動かし、対象児童の視線の動きをみとる。 2つの背景(画像あり、黒一色)に静止画を提示し、対象児童の視線の動きをみとる。 画面に注目しやすいよう、言葉かけやゆびさしをする。

活用にあたっての留意点

【機器について】

- 対象児童生徒の体調に合わせて、緊張が強くなりすぎないように気をつけて取り組む。
- 視線を合わせやすい提示の仕方は児童生徒一人ひとりで異なるので、視線入力を始める際には、姿勢づくりを中心としたアセスメントを行ってから実施する。

【子どもの学びについて】

- 児童生徒が画面に視線を合わせることや、他者とのコミュニケーションを意識できるように、言葉かけやゆびさしでの支援を行う。
- 取組内容をふまえ、「伝わったよ」「できたね」などの、児童生徒が達成感を感じることができるよう言葉かけを意識して行う。